女子大國文　第百三十九号　平成十八年六月三十日

〈怪しうひそむもの〉への眼差し

峯村至津子

一　「心のそこに怪しうひそむ物」

右の章題は、樋口一葉が、自作「われから」（『文芸倶楽部』第二巻第六編〈明治二九・五・一〇　博文館〉）のヒロインお町について語った言葉の一部分である。[1] 一葉最後の小説発表作となった「われから」は、当時の常識から逸脱するヒロインを描いた作品であるが、その描き出された〈逸脱〉に於いては、〈社会に対する反抗〉といったことよりも、ヒロインを突き動かしてゆく、その〈心の底に怪しうひそむもの〉に焦点が当てられていたと言える。

最近の拙著『一葉文学の研究』（平成一八・三・二四　岩波書店）の中で論じたように、「われから」はいきなりその冒頭から、満たされないものを抱え込み、それを上手く解消することができないヒロインが、そのもどかしさを、当時の〈人の妻〉として非常に問題視される言動によって無意識のうちに発散させてしまう様を鮮烈に描き出していた。ヒロイン自身が十分自覚的でない故に、いつ何時、どういったかたちで噴出するかわからない心の中の鬱屈。自身で把捉しきれないものを自らの心に棲まわせてしまったヒロイン＝家の中の平凡な女の危うさ――それが、論者が本作の眼目として注目した

ことであった（以上、拙著第八章参照）。

〈女の心への着目〉というのが同時代の言説に於いて欠落していた視点であることは先の拙著に於いて見たことであるが（第六章、七章等参照）、一葉文学に於いて、〈女の心の底に怪しうひそむもの〉への眼差しは、いつ頃から顕著に現れてくるのだろうか。今後、その源流を辿ることが課題となるが、まずは、章題に掲げた先の言葉に一葉がこめたものを、もう少し明確に捉えてみたい。

1　稲荷社前の物思いをめぐって――緑雨・露伴の読みと一葉の意向――

先の一葉の言葉は、彼女に「われから」の読みについて質問を投げかけた斎藤緑雨との応酬の中で発せられたものである。一葉日記によれば、明治二十九年五月二十九日、一葉を訪ねた緑雨は、「われからの評めさまし草三人冗語の間に大いに見解を異にせる」という事情を語り、「わがいふ処尤なるか露伴の思ふ処当れるか」、一葉の「所存」を確かめるために二つの問い（ヒロインお町の稲荷社前の物思いの内実、及び、お町と書生千葉との姦通の実事の有無）を一葉に向けた。[2] ここで問題とするのは、そのうちの一番目の問い――「われから」九章、稲荷社前に於いてヒロインお町が囚われた不安について――である。緑雨が発した疑問とは、次のようなものであった。

いなりの社前に奥方物おもひを生ずる処あり、あれは親の世よりの事につきて明くれ物をおもひ居り我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事なからずやとの念かしこにいたらぬ前より有しものならんか

それとも、

あの奥がたの性としてさる事常日頃おもひ居るべきにあらず　真に偶然の出来事として描かれたる物なるべし

という二つの読み方のうち、「作者」の執筆「当時の心は如何成しか」というものである。右の二説のうち、「前の説は露

伴のとく処　あとなるは我が論じつる也」というように、露伴と緑雨との間で〈宿命〉か〈偶然〉かという点で読みが対立していたようであるが、一葉の答えはと言えば、

誠にこれは偶然の出来事なり　しかれども常々おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物のありて心細き感は常々有しに相違なかるべくさて此事は偶然におこりたるなるべし

という、「二論の中間」をゆくようなものであった（以上、『全集三㈠』四八四―四八五頁）。つまり、乳飲み子だった自分と父親の与四郎を捨てて出奔した母美尾のことを、「常日頃」意識的に考えていたわけではないが、無意識のうちにわだかまっていたものがあり、その鬱屈が偶然この場面に於いて表に出てきたというのである。

2　一葉日記と「三人冗語」との齟齬

ところで、この緑雨と一葉のやりとりをめぐる一葉日記の記述について、十川信介氏は、露伴の読みに関する部分での、日記と「三人冗語」との微妙な食い違いに着目している。[3] 1で引用した日記に引かれている露伴説では、引用箇所傍線部にあるように、「親の世よりの事」というのが、「我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事なからずや」といった、「夫を裏切ってでも何ごとかをなしかねない「怪しうひそむ物」の自覚」（十川氏、一七七頁）という内容として捉えられているのがわかる。しかし実際には、「三人冗語」（『めさまし草　まきの五』〈明治二九・五・二五　盛春堂〉）に掲載されている、「ひいき」と名乗る評者によるこの説の当該部分では、日記とは異なり、〈母美尾に捨てられた父与四郎と同じように、自らも夫に捨てられるのではないか〉という不安として解釈されているのである。その箇所を次に引く。

（前略）お美尾与四郎が上をも、やゝ詳しくものしたるは、第九回のお町神前に我が未来を危ぶむところに呼応せしめんがためなり。我が父は我が母に棄てられ玉ひて後此富を成し、此家をも得玉へり。されど其は男なればこそな

〈怪しうひそむもの〉への眼差し

れ。（中略）若し我が父の如く我が身の棄てらるゝこともやあらば、我が行末は如何なるべき。あゝ我は人によりて立つ女の身なりと他人の事にもあらぬ父が上のことの胸に浮めばこそ、お町は其小祠の前にて女の心よわくも取越した る物思ひに締つけらるゝやうなる苦しみを覚えたるなれ。（後略）　（一三―一四頁）

露伴説と推定される右の読み[4]を「やや平凡な解釈」とする十川信介氏（前掲書、一七八頁）は、〈捨てられた父親と同じ運命を辿るのでは…〉というこの説の中身が、一葉の日記に記されている緑雨の発言の中では、夫との生活に安住できず、出奔という行為にはしった〈母と同じ道を辿るのでは…〉という読みに変化していることから、ここに、露伴とは異なる解釈で「われから」を読んでいた緑雨と、それを否定しなかった一葉との共鳴を見ている（一七七―一七八頁）。

十川氏は、この〈父〉→〈母〉の食い違いが「一葉の書きまちがいでないとしたら」（一七七頁）と仮定して論じているが、もしも仮に、緑雨が露伴説を「三人冗語」通りに一葉に伝え、一葉がそれを「書きまちが」えたのだとしても、そこに作者一葉の本音が表れているという点に於いては違いはないと思われる。本稿では、「常々おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物のありて」と自身が解説する、一葉がお町に於いて描き出そうとしたものが、〈父と同じ運命を辿る予感とその不安〉という「三人冗語」の先の説では到底捉えきれないものを含んでいたということを、「われから」本文から読み取ってみたい。

3　恨みと共感の欠如――父母に対するお町の思い――

先に引いた「三人冗語」の説は、「われから」九章に於いて、お町自身が夫恭助に向けて語った、「私は貴君（あなた）に捨てられは為（せ）ぬかと存じまして、夫れで此様に淋（さび）しう思ひまする」という言葉（『全集二』一九三頁）をそのまま踏まえたものと言える[5]。恭助に心中を訴えようとするこの場面のお町の態度に偽りは見て取れないが、しかし作中人物の発言が、彼らの心中

を正確に余すところなく伝えているという保証はない。よって、お町の発言を額面通りに受け取り、それ＝彼女の心にわだかまるもの、と捉えるこの解釈は短絡的である。不幸な宿命（引用箇所傍線部）と頼りない女の身の自覚（同波線部）という極めてわかりやすいこの解釈だけでは説明しきれないものが、この作品には描かれていたのではなかったか。

そもそも、「三人冗語」で「ひいき」が言うようにお町が常日頃、自分が父と同じように捨てられるのではないかという不安に悩まされているのだとしたら、もう少し作中に、お町の父に対する心情的な寄り添いが見られてしかるべきである。同じく捨てられた者としての父への共感、一方、自分たちを捨てた母に対しては嫌悪感が描かれてもおかしくないのだが、この作品には、そういったことが甚だしく欠如している。「われから」より二年半ほど前に発表された「琴の音」（『文学界』第十二号（明治二六・一二・三〇　文学界雑誌社））では、母が家を出、父と共に捨てられた主人公が、父が非業の死を遂げた後、「父が終りの悲しきを見るにも、我が渡邊の家の末をおもふにも、母が処業（しわざ）は悪魔に似たりとさへ恨まれ」、「人の心に誠なきものと思ひさだめ」、「ねぢけゆく心」は止まるところを知らず、「恨みに堪えかねては死なばやと思ひたる事もあり」というふうに恨みによって身も心も蝕まれてゆくさまが描き出されていた[6]（上、『全集一』二七〇―二七一頁）。それと比べた場合、お町を描くにあたっては、一葉が意識的に母への恨みという要素を排除していると見られるのであり、この点はもっと注目されてもよいのではないかと思われる。ここには、母への恨み・憎しみをたぎらせるというふうにわかりやすくは動かない心をお町が抱えていたことが示唆されているのである。

大畑照美氏は、お町に母への憎しみが見られないのは、「出奔のことは知らされていない」からだと論じている[7]が、この見解には疑問がある。氏は、「出奔の事実」を「もし知っていて、父の自分への冷淡さがそこに起因すると思っていたなら、彼女は母を憎んでも余りあるだろう」と述べている（注7に同じ）。だがお町は、「私をば母親似の面ざし見るに癇の種とて寄せつけも致されず、朝夕さびしうて暮しましたるを」（九章、一九四頁）と自ら夫に語っているように、母美尾とう

りふたつであるが故に、母に対する父与四郎の恨みを一身に受けて育ってきたのである。「癇の種とて寄せつけも致されず」という言い方からは、具体的な詳細までは知らなくとも、なにがしかの逸脱行為を母が犯したこと、そしてその所行は、父がいつまでも許すことができないほどのものであったことを、彼女が感づいている様子がほの見える。何より彼女は、「母親似」であることを理由に父が自分に愛情を見せなかったのだということを知っているのであり、いつの時点かそれを知ってからは、父親のその態度に接したり、或いはそれを思い出したりする度、母のしでかしたことの重みを体感させられてきたに違いないのである。よって、先の大畑氏の論は成り立ちにくく、お町に母への憎しみが見られないことについては、別の面からの考察が求められるであろう。

お町に父への共感が稀薄であることには、こうした生い立ちの事情が影響していよう。[8] そして先のお町の発言は、自らが、恐らく重大な逸脱行為を犯したであろう「母親似」であるということが、常に意識はせずとも、否応なく彼女の心に食い込んでいるのではないかということを窺わせる。しかしそれでも彼女には、恨みと憎しみ一色で母への感情を塗り潰してしまうというような強い思いも見られない。

九章のこの場面以外にお町自身が母のことを考えたり、語ったりしている箇所はない。そして、彼女が自らの内面を恭助に向けて懸命に言語化しようとした唯一の場面であると言ってよいこの箇所でも、お町は自らの「さびし」さは語れても、父と母に対する自身の感情をあからさまに語ることができていない。このなかなか言葉にできないというところに、彼女の心に食い入っている簡単には割り切れない父母への屈折した思いが表れているように見える。[9]

4　制御しきれない心

確かに九章でお町が意識し、恭助に向かって口にしているのは、「三人冗語」「ひいき」が指摘するように「限りも知れ

ず広き世に立」つ夫から顧みられなくなるのではないかという不安（一九三―一九四頁）ではあるが、「ひいき」の読みは「人によりて立つ」「女の心よわ」さというものを殊更に強調しすぎているきらいがある。お町の心の奥底に巣くうものは、単にその不安・心細さに悩み、嘆くだけではない方向に彼女を誘ってゆく。続く十章では、お町の鬱屈が、使用人の女性たちに「心うかれる様な恋のはなしなどさせて聞くに、人は腮のはづるゝ可笑しさとて笑ひ転ける様な埒のなきさへ、身には一々哀れにて、我れも思ひの燃ゆるに似たり」（一九四―一九五頁）というふうに蠢き出すさまが捉えられていた。

父にも母にも見捨てられたお町ではあるが、孤独だったから恨む、夫に顧みられなくなるのが怖いから身を慎む、などというようには短絡的に動かないヒロインの心をこの作品は捉えていたのであり、だからこそ一葉はそれを、「心のそこに怪しうひそむ物」と表現したのだと考えられるのである。

二　〈怪しうひそむもの〉の源流

それでは一葉文学に於いて、容易には捉えがたい心への着目は、いつ頃から作品に現れ始めるのだろうか。その見取り図を描いて、小稿を締め括る。

1　端緒――「雪の日」――

「心のそこに怪しうひそむ物」への着眼が明らかに見え始めるのは、「雪の日」（『文学界』第三号〈明治二六・三・三一　女学雑誌社〉）あたりからであることは間違いあるまい。[10] 本作では、学校教師桂木との関係を噂されたヒロインが、「此胸かきさばきても身の潔白の顕はしたや」という意識の表層の思いとは裏腹に、降りしきる雪に誘われるように「前後無差別に」家を出奔し、桂木の許にはしるという行為が、過去を振返るヒロイン自身の言葉によって語られている（『全集一』二五七

―二六〇頁参照)。その中に見える、「其心の底何者の潜みけん、駒の狂ひに手綱の術も知らざりしなり」(二五九頁)という、かつての自分が突き動かされ、制御しきれなかった心についてのヒロインの述懐に、〈怪しうひそむもの〉への眼差しが明らかに看取されるのは、大勢の認めるところであろう。しかし、それが過去の「あやまち」(二五六頁)を語るという懺悔譚の枠組で括られているため、過去を語ることに重点が置かれていることは確かであるとしても、〈心の闇〉の部分を評価する強い姿勢が表れているとまでは言えない。そういった意味では、次作の「琴の音」(前出)が一つの境界線と言えるのではないかと考えられる。

2　序章――「琴の音」――

「琴の音」は、前述の如き経緯(本稿一の3参照)から、「悪に染まった少年が、妙なる琴の音を聞くことによって真人間になるという更生の過程を描い」た作品であると要約されてきた[11]。傍線を付した作品後半部については、「あまりにも観念的な、かつお手軽な「貧民救助」」(滝藤満義氏[12])、「多少唐突の感も否めない救済」(屋木瑞穂氏[13])などというようにやや批判的に捉えられる傾向がある。屋木氏は、後年の「わかれ道」の吉三が、優しくしてくれる女性に出会っても、「癒してくれたのも束の間、再び「置去り」にされてより孤独を深める結果となる」ことに着目し、一葉が「琴の音」「以後の作で救済の可能性に疑問符を投げかけていくことになる」と論じているが、そもそも「琴の音」で想定されている〈救済〉とは、不幸な孤児が年上の女性によって苦しみから救われ、幸せになるといった単純なものではない。

「琴の音」の主人公の少年金吾の心は、母に捨てられた当初は、必ずしも恨み一辺倒で凝り固まっていたわけではない。その点は語り手によって「はじめは浮世に父母ある人うらやましく、我れも一人は母ありけり、今は何処に如何なることをしてと、そゞろに恋しきこともありしが」と語られている(上、『全集一』二七〇頁)ところより明らかである。自分を捨

てた人への恋しさを禁じ得ない、まさに後年の「われから」のお町に於ける、母美尾への恨みの欠如を先取りするような、一筋縄ではいかない、潔癖に恨みに徹しきれない人の心の一端が、ここで確かに捉えられていることに注意したい。上記の引用部は、一の3で引用した、「父が終りの悲しきを見るにも」という箇所に繋がっていくのであり、つまり、本来恨むべき相手かもしれないが、何とはなしに母が恋しいというのが正直な気持ちであったのだが、しかし、「父が終りの悲しきを見」、「我が渡邊の家の末をおもふ」といった、〈家〉や〈父〉のことを思えば、「悪魔に似たり」というように母を恨む気持ちになっていったという文脈なのである。そうしたなりゆきを「ねぢけゆく心」（同前）と表現する語り手は、「恨みに堪えかねては死なばやと思ひたる事もあり」（上、二七一頁）というように、金吾にとって〈恨む〉ことが非常な苦しみであったことを語ることを忘れない。自らを捨て、父を死に至らしめた母を恋う正直な心の動きを封じ込めたことが、彼を傷つけていったのである。

「うもれ木」あたりまでの一葉の初期作品に於いては、「死なばやと思ひたる」といった局面に至った時、主人公たちはまず間違いなく自死の道を選んでいた。例えば「別れ霜」（『改進新聞』〈明治二五・四〉）では、家同士の争いから仲を裂かれた許婚同士が心中を企てる（第十三回）のだが、芳之助とお高、二人の意図は、その心中の場所が「先祖累代の墓所」（『全集一』四六頁）であることにも象徴されるように、身を捨てて、親の「後悔の念」（四七頁）を促そうというものであった。「先祖に対し家に対す孝は二人が命なり捨てゝ栄えある身ぞと思へば何方（いづく）に残る未練もなし」（同右）とは芳之助の言葉だが、こうしたご立派な言葉とは裏腹な彼等の真情が開示されてゆく、といった方向にこの作品が進むことは決してない。この時は心中自体は失敗し、お高は家の番頭に止められ、一人死に後れてしまうのだが、「日をだに経れば芳之助を追慕の念も薄らぐは必定」（第十四回、四八頁）との周囲の期待に反して、厳しい監視の中機会を窺い続け、ついに七年の後、彼女は芳之助の後を追う。主人公二人の言葉と行動に齟齬は見られず、許婚や家を大事と思う彼等の心に揺るぎは見られな

い。

「たま襷」（『武蔵野』第二編〈明治二五・四・一七　今古堂〉）に於いても、ヒロイン青柳糸子は、自分を慕う忠臣松野雪三への義理立てと、彼女自身が思いを寄せる竹村緑に身の「潔白」を証し立てるために、自ら命を絶つ（下、『全集一』九〇―九一頁）。「経つくえ」（『甲陽新報』〈明治二五・一〇・一八～二二、同一〇・二四～二五〉初出[14]）最終章では、自分をいとおしんでくれた男の死後、「彼の人に約束の覚えな」い（『全集一』一三六頁）にも拘わらず、操を立てて経机を前に独り住みの生を送るヒロインを描く。作品の最後に付け足されている「口の悪るき」第三者と語り手の批評（同右）から、前の二作と比べれば不安定感が生ずる仕組みにはなっているが、それがヒロインを通して描かれるまでには至っていない。

このような初期作品に於いては、主人公たちの揺るぎない潔癖さが身上と言えるのであり、その集大成が「うもれ木」（『都の花』第九十五号〈明治二五・一一・二〇〉～九十七号〈同一二・一八〉分載、金港堂）の孤高の芸術家、入江籟三であった。篠原の奸計に知らず知らずのうちに利用され、「最愛の妹」も失った籟三は、「汚濁（をじよく）」にまみれた「世」に取り込まれまいと、「我が友は汝よ、汝が友は我れよ、いざ共に行かん」と、我が作品と共に自決する（第十回、『全集一』一七六―一七八頁）。

これまで見てきた作品では、家や操や自らの信じる道に対する彼等の潔癖さが、迷わず自決したり、「空蟬の世の中すて」たりする（「経つくえ」、一三五頁）潔さと呼応しているのである。[15] しかし「琴の音」に於いては、明らかにこうした様相に変化が見られる。「幾度水のおもてに臨みて、これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり」（上、二七一頁）と語られるように、金吾が簡単に死ねないのは、父と自分と家を捨てた母の裏切りに対して、彼が恨みに徹しきれない矛盾を心中に抱えているからである。封じ込められた母に対する執着が、彼にこの世を捨てることを許さないのである。それは、琴の音による金吾の〈救済〉が、「心の奥にひそまりし優しさ」を溶かし出し、「こぼれ初めぬ

る涙」と共に「かねては悪魔と恨らみたる母の懐かしさゝへ身にしみて、金吾は今さら此世のすて難きを知りぬ」というふうに語られているところに明らかである（下、二七二―二七三頁）。

「琴の音」は、「金吾はこれより百花爛熳の世にいでぬ」という一文で締め括られる（同二七三頁）が、これを「いかにも甘い」とする藪禎子氏のような見解（注13に同じ、九頁）を論者はとらない。なぜならその一文の前には、〈救済〉をもたらした「琴のねの、あはれ百年の友とや成るらん、百年の悶へをや残すらん」という叙述があって、抑圧していた心を取り戻した金吾の今後の道程が、決して平坦なものではないことをこの作品は自覚しているからである。その平坦ではない道程、それこそを、この作品は「百花爛熳の世」と呼んでいるのである。前出の屋木瑞穂氏の論は、右の傍線部を「救済の可能性」への「疑問」というふうに読んでいるわけだが、たとえもたらされるものが「百年の悶へ」であったとしても、そういう感情に身を委ねて生きてゆくことこそが〈人の生〉であると、この作品は説いているのではないだろうか。即ち「琴の音」に描かれた〈救済〉の真の意味とは、それまでの作品が安易な潔癖さによって捨象してきた〈怪しき心〉を救い上げることだったのである。ここで言われる「悶へ」とは、自らの正直な感情を抑圧して生きてきたこれまでの苦しみとは別物であったはずであり、そうした「悶へ」をもたらすかもしれない「爛熳の世」に向かって歩み出す主人公を見送って作品を閉じた作者の前には、汚辱にまみれても、潔癖には生きられなくても、自らの〈怪しき心〉を自覚してもそれでも生きてゆく、後期の小説のヒロインたちへの一筋の道が開けていたのである。人との関わりの中で苦しむことがあっても、それでも「世」の中で生きてゆくこと。「琴の音」の終局部は、そういったヒロインを生み出してゆくその後の〈一葉文学〉の展開への序章だったのである。

従来の研究史では、例えば滝藤満義氏が、「「上」が比較的写実的で、後年の文学につながる要素が多いのに比べ、「下」は逆で、前期につながるものが多い」（注12に同じ、八七―八八頁）と述べているように「下」よりも「上」を重んじる傾向

があるが[16]、論者はこれまで論じてきた理由から、「下」こそが、「やみ夜」のお蘭や「にごりえ」のお力ら、その後のヒロインの登場を準備したのだと考える。

3　自覚――「花ごもり」――

心とは、初期作品が描いてきたように潔癖で揺るぎないものではない。「雪の日」「琴の音」を経て見えてきたものは、「花ごもり」（『文学界』第十四号（明治二七・二・二八）、十六号（同四・三〇））に至って、登場人物自身が自覚するものとして明確に現われる。

主人公与之助とその従妹お新は、「おさなだちより馴れ」親しんで共に暮らし、許婚も同然の間柄であった（其一、『全集一』二七四―二七五頁）。しかし与之助の母お近は、二人の仲を裂き、息子を「父は有名の某省次官どの、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女」（其二、二七八頁）と結婚させようとする。お近は、それが「我が瀬川の家の為」「与之助が将来（ゆくすゑ）の為」（其一、二七六頁）などと考えてはいるが、実のところ、「今の心にいさゝか屑ぎよからずとも」（同二七五頁）と自覚しながらも彼女がこれを断行してゆこうとするのは、

　世の人よりは柔らかに穏かすぎたる良人を持ちて、万事にもどかしく歯がゆかりし年月も、流石女子の我が一存をふるひ難くて、空しく胸のうちに納めたりし思ひは、中々に消えんともせず、ともすれば燃え出でゝ押へ難き炎に身をも焼くめり（後略）　（其二、二七七頁）

といった、長年鬱屈させてきた欲求に身をまかせて生きようとしているからなのである。彼女は言う。「衆人（ひと）の読むべき書物（ほん）をよみ、衆人のいふべき事をいひ、衆人の行ひたるあとを踏んで」ゆくことは、「糸もて操らるゝ木偶のやう」なものだと（同二七八頁）。与之助に対する「平常（つね）の詞」とは、

我が心といふものなく、意気地なくつまらなく、過失もなく誹りもなきは男の身として本意にては有るまじ、事に臨みては母ありとも思ふべからず、家ありとも思ふべからず、取るべき道の重大なるに寄りて進み給へ　（同右）

というものであり、家や親を第一に重んじるというような既成のあるべき道に従って生きるのではなく、「我が心」にのみ従って生きるようにという彼女の主張は、作中に於いて余すところなく披瀝されている観がある。

しかしこれは、主人公ではない脇役を通してだからこそ、描きやすかったとも言える。「花ごもり」では、お新への情を重んじ、「心根の清く尊く美くしく立派に」生きるよりも、「嘘も真実も偽りも、美しきも醜きも一呑みに呑みつくして、此世の中に高く飛ぶ心は無きか」と訴える（其三、二八二頁）お近に、主人公の与之助が抵抗してみせながらもついには屈服せざるを得なくなるというかたちをとっており、揺るぎない一定の枠になど収まるはずのない〈我が心〉への着目が明確な自覚と共に描かれてはいても、それを全面的に肯定するには未だ曖昧な要素が残っていると言わざるを得ない。

清濁併せて抱え込み、迷いながらも生きてゆく人の〈心の闇〉が主人公を通して追究されるのは、次作「やみ夜」のヒロインお蘭の登場を待たねばならなかった。

4　展開――「やみ夜」――

「やみ夜」（『文学界』第十九号〈明治二七・七・三〇〉、二十一号〈同九・三〇〉、二十三号〈同一一・三〇〉に分載）については、これを「無念のうちに自死した父の怨念が重なった父娘の復讐物語」と読み（関礼子氏[17]）、また、舞台となる松川屋敷を「おどろおどろしい死の世界」とし、「松川屋敷の闇と死の世界は、文明開化へのパラドックスであり、「才子の君、利口の君万々歳」の明治社会総体につきつけられた陰鬱な反世界」であるとする捉え方（前田愛氏[18]）も相変わらず根強い。

松川屋敷に「おどろおどろし」さを見る点では論者も同じであるが、これらの説とは異なり、現実社会に対する反措定

としての完璧なる〈異界〉としてではなく、一見〈異界〉を装いながら、汚辱にまみれた現実に侵食されつつある、別の顔を裏に隠し持つ場所として、論者は松川屋敷を読む。また、ヒロインお蘭を「父の存在に呪縛される娘」とする見解（関礼子氏、同前）についても疑問があり、父の恨みを受けとめつつもそれに殉じきれない、〈ひび割れた父と娘の物語〉として本作を読むことが可能なのではないかと考えている。「やみ夜」論として別稿を用意し、論ずる予定である。

・一葉作品及び日記の引用は筑摩書房発行の『樋口一葉全集』により、それぞれの巻を『全集一』『全集二』『全集三(上)』などというように略記し、発行年月日・発行所の表記は省略した。

・本稿では、引用文献全般に亘り、字体を現行のものに改めた。また、濁点を補い、ルビを省略した箇所がある。なお傍線等は、特に断らない限り論者による。

注

(1)「みづの上日記」（明治二九・五・二九）、『全集三(上)』四八五頁。

(2)『全集三(上)』四八四―四八六頁参照。

(3)『明治文学　ことばの位相』（平成一六・四・二三　岩波書店）所収、「一葉のことば」―「2　緑雨は一葉をどうよんだか――「われから」をめぐって」、一七四―一七八頁。初出は『資料と研究』第二輯（平成九・一　山梨県立文学館）。

(4) 日記との食い違いはあるものの、「ひいき」説の、稲荷社前の物思いの場面を重要視し、「お町は（中略）苦めるものなり。さればこそ父母が上をも三回より七回までに書きてお町が心の中に如何なるものあるべきかを示し、九回に至りて然るべき機と景との間にお町が愴然として自ら感ずる由を述べ」（一四頁）という、お町が父母のことで苦しんでいたとする読みは、日記が伝

える露伴説と一致するので、「ひいき」＝露伴と捉えてよいと考えられる。

(5)「三人冗語」からの引用箇所の中略部分、「あのやうなる洒落ものに成り給ひし我が夫の御心の底は、今や我が眼にて見透し得べしとも思はれず」といった発言や、同じく波線部の「取越したる物思ひに締つけらるゝやうなる苦しみを覚えたるなれ」という文言なども、「われから」本文の、「いつの間に彼のやうな意気な洒落ものに成り給ひし、由断のならぬと思ふと共に、心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦るしさは、胸の中の何処とも無く湧き出ぬ」(九章、一九二頁)、「孰れも取止めの無き取こし苦労で御座りませうけれど」(同、一九四頁)などといった部分を明確に踏まえている。

(6) 例えば同時代小説、大橋乙羽「子煩悩」(『太陽』第一巻第七号(明治二八・七・五　博文館))に於いても、母に捨てられた娘が、父の死後、母と再会し、恨みを述べ、再度母を取り戻すという展開が見られる(第六回〜第七回)。「子煩悩」については、前出の拙著『一葉文学の研究』第七章も参照されたい。

(7)『『われから』論——母と美尾、美尾と町子——』、『近代文学研究』第十八号(平成一三・二・二八　日本文学協会近代部会)八二頁。

(8)「三人冗語」の「ひいき」の解釈を「深読み」「誤読」とする滝藤満義氏は、「父にうとまれたお町に、父の運命と自己のそれを重ね合せて受けとる必然性はどこにもない」と指摘している。『一葉文学　生成と展開』(平成一〇・二・二〇　明治書院)所収、「『われから』とその周辺——人妻たちの系譜Ⅱ」、二六一—二六二頁。同論文初出は『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』(昭和五九・四)。

(9) 他にも、かつては夫恭助の遊蕩を無邪気に責めていた(一章)お町が、彼が妾と子の存在を隠し通していたことを知った時点では、「打つけには恨みも言ひ敢へず、心に籠めて」しまっている(十二章、二〇一頁)ように、抜き差しならない物思いに囚われた時、それを容易に言語化できない様子が描き出されている。

(10) それより前に、まずは「暁月夜」(『都の花』第一〇一号(明治二六・二・一九　金港堂))のヒロイン一重の造型にその萌芽が看取されるという見解を持つが、それについては機会を改めて論じたい。

(11)『樋口一葉事典』(平成八・一一・一〇　おうふう)第一部「作品事典」の「琴の音」の項(愛知峰子氏)より。三一頁。

(12) 前掲書（注8参照）所収、「一葉文学の転機――「雪の日」から「やみ夜」まで　I」、八七頁。同論文初出は『論集樋口一葉』（平成八・一一　おうふう）。

(13) 『琴の音』、『国文学　解釈と鑑賞』第六十八巻五号（平成一五・五・一　至文堂）七六頁。以下の引用も同じ。これより前に藪禎子氏も、「一葉と「世の中」」（『藤女子大学　国文学雑誌』第五十六号（平成八・三・二五））の中で同様の見解を述べている（九―一〇頁）。

(14) 全集は『文芸倶楽部』第一巻第六編（明治二八・六・二〇）再掲本文によるが、脚注により初出との異同が確認できる。本稿での論旨に関わる異同はない。

(15) かつて論者は、主人公たちが迷いなく己の思いを貫いてゆける、こうした初期作品の世界を、楽天的で（幸福）な物語と規定した（前出の拙著、第五章参照）。

(16) 藪禎子氏も、「琴の音」から後期作品群への繋がりを、「「世」への恨みを内に抱え、「世」との違和を生きる人々」の「系譜」と見ている（注13に同じ、一〇頁）。

(17) 「「暗夜」の相互テクスト性再考」、『国文学　解釈と鑑賞』第六十八巻五号（注13参照）七八頁。

(18) 「一葉の転機『暗夜』の意味するもの」、前田愛著作集第三巻『樋口一葉の世界』（平成元・九・三〇　筑摩書房）所収、一七九及び、一八一頁。同論文初出は『文学』（昭和四八・九）。

（本学助教授）